

『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』に見る
ソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）

津 上 智 実

Soprano Singer NAGAI Ikuko (1893-1983) reported in Three Daily Newspapers
in Colonial Korea: *Busan Daily*, *Chosun Newspaper*, and *Daily Report*

TSUGAMI Motomi

Abstract

This paper aims to describe the ‘Singing in Japanese Movement’ given by Soprano singer NAGAI Ikuko (1893–1983) in colonial Korea through the daily newspaper articles found in *Busan Daily*, *Chosun Newspaper* and *Daily Report*. In the database of Korean Newspapers, twenty-four articles on her were found in *Busan Daily*, thirteen in *Chosun Newspaper*, and five in *Daily Report* from 1928 to 1932. From their contents, it became clear that her performing tours were supported first by the governmental newspaper *Daily Report*, and then by non-governmental newspapers such as *Busan Daily* and *Chosun Newspaper*.

In 1932, NAGAI explained that her Korean tour was the sixth one. The analysis of these articles provides an overview of her Korean tours from the first to the sixth. Programs of her three concerts in Busan and Keijo in October 1930, and in Busan in April 1932 were printed in these newspapers. From their analysis, her program construction became clear, making the section of ‘the famous pieces of eight countries’ as its central part. It cannot be overlooked that she made it a custom to sing ‘Kimigayo’ with her audience at the end of her every recital also in colonial Korea. In addition, it was found that she had a connection with NAGAI Ryūtarō, a famous politician at that time.

The period when she developed her ‘Singing in Japanese Movement’ (1925–1941) was a time when Japan pushed colonialism strongly towards Korea, Manchuria, and Taiwan. In this trend, NAGAI’s activities proclaiming cultural nationalism must have had multiple problems as ‘a performance of Japanese women’s newly gendered identity in multiple publics, and a performance of Japanese people abroad intent on proving their status to their neighbors’ (Mari Yoshihara, 2004, 976–977).

Keywords: NAGAI Ikuko, *Busan Daily*, *Chosun Newspaper*, *Daily Report*, Singing in Japanese Movement, Kimigayo

要 旨

本論は、邦語歌唱運動を展開したソプラノ歌手の永井郁子（1893～1983）に関する研究の一環として、日刊3紙『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』掲載の記事を検討し、植民地朝鮮における音楽活動の一端を明らかにしようとするものである。

今回の調査では、データベースで検索が可能な新聞で概略を掴むところから始めることとし、『釜山日報』に24点、『朝鮮新聞』に13点、『毎日申報』に5点、計42点の記事（1928～1932）を見出した。それらの内容から、永井郁子の朝鮮楽旅について、まずは政府系の『毎日申報』が音頭を取った後、1930年には民間新聞の『朝鮮新聞』が、1932年には同じく民間新聞の『釜山日報』が肩入れたことが判明した。実際、1928年の京城での演奏会は毎日申報社、1930年には朝鮮新聞社、1932年の釜山での演奏会は釜山日報社が主催となって、記事多数を掲載して盛り立てたことが明らかとなった。

1932年に永井郁子は朝鮮楽旅はこれで6回目と述べており、今回の調査で第1回から第6回に及ぶ演奏旅行の大まかな輪郭を掴むことができた。また、3回の演奏会（1930年10月7日釜山、同17日京城、1932年4月14日釜山）のプログラムが記事中に掲載されており、その分析から演奏曲目の組み立てを把握することができた。さらに、演奏会の終わりに聴衆と「君が代」を斉唱することを慣例化していたという問題点や、憲政会の論客として知られた政治家永井柳太郎との繋がりといった事柄が浮かび上がってきた。

永井郁子が邦語歌唱運動を展開した時期（1925～1941）は、日本が朝鮮や満州、台湾に対する植民地主義を強力に推し進めた時期に当たり、その中で文化的民族主義を掲げた永井の活動は、当時の音楽家の活動のあり方として多義的な問題を孕んでいる。

キーワード：永井郁子、釜山日報、朝鮮新聞、毎日申報、邦語歌唱運動、君が代

1. はじめに

本論は、邦語歌唱運動を展開したソプラノ歌手の永井郁子（1893～1983）に関する研究の一環として、日刊3紙『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』掲載の記事を検討し、植民地朝鮮における音楽活動の一端を明らかにしようとするものである。

筆者は以前にピアニスト小倉末子（1891～1944）の京城演奏旅行（1916年12月）について、当時朝鮮で発行されていた諸新聞の網羅的な調査を行なったことがあるが¹、それは訪問回数が1回で、訪問先が京城のみであったから可能なことであった。今回の永井郁子の場合は、訪問回数も多く、訪問先も多岐に亘るため、まずはデータベースで検索が可能な新聞で概略を掴むところから始めなければならない。そこで、韓国国立図書館のウェブサイトおよび国史編纂委員会（<http://db.history.go.kr/>）の「韓国史データベース」で原紙検索が可能な日刊3紙『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』から始めることとした。

2. 『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』での報道

日韓併合後の朝鮮では種々様々な新聞が林立し、「24の日刊邦人新聞と、5の日刊鮮人新聞の外、週刊月刊等を創して25の内外人新聞雑誌があり、8の日刊通信がある」という状況であった²。今回取り上げる3紙の概略を記す。

『釜山日報』（釜山、日本語、朝夕刊12頁、購読料1ヶ月1円、1907～1945）は「明治38年2月の創刊、同41年10月1日より現題号」となり、大正8年に個人経営から株式会社に改組する「と同時に東亜の関門たる釜山駅頭に広壮なる社屋を建築し内容外観共に充実」³したと謳う日刊紙である。『釜山日報』は、韓国総督府（1910年以降は朝鮮総督府）の機関紙『京城日報』（25,509部）と『朝鮮新聞』（17,371部）に次ぐ発行部数（17,210部）を誇り、配布先も広く、「朝

1 津上智実 2014。

2 井川充雄、2017、85頁。

3 中村明星、1937、48-49頁。井川充雄、2017、164-166頁。

鮮の全地域をカバーする朝鮮内の全国紙的な性格も帯びていた⁴とされる。

『朝鮮新聞』（仁川、日本語、朝夕刊10頁、購読料1ヶ月1円、1908～1942）は「明治21年の創刊に係り常に朝鮮のみならず帝国の新領土を通じ最も古く且波瀾ある歴史を有する」「朝鮮唯一の民論代表機関」と自負する新聞で、大正14年に個人経営から株式組織に改組した⁵。同紙は「1910年以降も民意を代表する新聞社として総督府の出す『京城日報』とは対極にあり双壁をなしたとも評価され」、「1942年2月、総督府の一道一紙政策によって廃刊するまで……『京城日報』とともに朝鮮の二大新聞の一つとして君臨⁶した新聞と評される。

『毎日申報』（京城、ハングル、朝夕刊10頁、1910～1945）は、韓国総督府（1910年以降は朝鮮総督府）の機関紙として発行されたもので、日本語による主紙『京城日報』との関係で今後、再調査する必要があると思われる。

これら3紙における永井郁子関連記事として、『釜山日報』に24点（1928年1点、1930年9点、1932年14点）、『朝鮮新聞』に13点（1928年1点、1930年9点、1931年3点）、『毎日申報』に5点（1928年4点、1932年1点）を見出した（記事の詳細については巻末の「記事一覧（1）～（3）」を参照）。これらの記事（計42点）の時間的な布置を「表1）永井郁子関連記事の掲載点数」に示す。

表1から、まずは政府系の『毎日申報』が音頭を取った後⁷、1930年の訪鮮については民間新聞の『朝鮮新聞』が、1932年については同じく民間新聞の『釜山日報』が肩入れしたことが浮かび上がってくる。今回ヒットした記事から主催者ないしは後援者の記載を拾うと、「表2）永井郁子独唱会の主催者と後援者」のようになる。

4 金泰賢、2017、17頁。

5 中村明星、1937、140-141頁。

6 李相哲、2009、47-48頁。

7 『京城日報』の「最近の社況」欄では「最近実行せる事業の主なるもの」の一つとして「永井郁子女史邦語独唱会」が挙げられていることを付記する。井川充雄、2017、130頁。

表 1) 永井郁子関連記事の掲載点数

年	月	毎日申報	釜山日報	朝鮮新聞	計
1928年	4月	4			4
	5月		1		1
	12月			1	1
1930年	9月		2		2
	10月		6	9	15
	11月		1		1
1931年	2月			2	2
	10月			1	1
1932年	4月		14		14
	5月	1			1
計		5	24	13	42

表 2) 永井郁子独唱会の主催者と後援者 (毎日=毎日申報、釜山=釜山日報、朝鮮=朝鮮新聞)

日時	会場	主催者	後援者	出典記事
1928-4-27	京城公会堂	毎日申報社		毎日1-4
1930-10-8	釜山公会堂	メソチスト釜山教会	釜山日報社	釜山2-7
1930-10-9	鎮海高等女学校講堂			釜山8
1930-10-10	馬山小学校講堂	馬山高等女学校		釜山9
1930-10-17	京城公会堂	朝鮮新聞社	永井郁子女史 後援会	朝鮮2-9
1930-10-23	群山喜笑館	群山日報社		朝鮮10
1930-11-8	木浦	木浦運動協会及び女 学校で葉会等		釜山10
1931-2-21	公立小学校大講堂	(● ⁸ 州) ●●高等女 学校●●会		朝鮮12
1931-2-22	沙里院旭座	京城日報支局主催	本社及各邦語 新聞支局後援	朝鮮11
1931-10-19	道●議会場	公州高等女学校校友 会音楽部		朝鮮13
1932-4-14	釜山公会堂	釜山日報社		釜山11-21

8 戦前の新聞記事で印刷が不鮮明な箇所や誤字脱字と思われるものも多く、読み取れない部分 (●で示した) も残っているが、ここでは現状の理解を示すことを優先する。

このように、1928年の京城では毎日申報社、1930年には朝鮮新聞社、1932年の釜山では釜山日報社が主催となって、記事多数を掲載して盛り立てたことが明らかである。

3. 朝鮮への演奏旅行

永井郁子は第500回記念演奏会用に『邦語歌唱十六講・いばらの道』（噴泉堂、1932）を自費出版し、その巻末に「邦語運動重要年表」を掲載している。そこから朝鮮関係を拾ってみると、「昭和3年4月24日・第一回鮮満楽旅」「昭和5年10月8日・再び鮮満楽旅につく。此度は北滿哈爾濱まで遠征」「昭和6年2月15日・北平より京奉線にて三度満州楽旅を試み帰途四度朝鮮各地を訪ふ」「昭和6年10月2日・五度目の渡鮮」と4項目がある。ここでは「再び」から「四度」へと飛んでいて、第3回の記載がない。

これら4項目と、今回の記事からの情報とを組み合わせると、永井郁子の朝鮮

表3) 永井郁子の朝鮮演奏旅行

掲載年月	記事数	備考（無印＝釜山日報、*＝毎日申報、**＝朝鮮新聞）
1928年4月	4	「第一回鮮満楽旅」（釜山、4/27京城*、奉天、大連、旅順）
1928年5月	1	
1928年12月	1	浄瑠璃の研究中
1930年9月	2	
1930年10月	15	「再び鮮満楽旅につく」（10/8釜山、10/9鎮海、10/10馬山、10/13元山**、10/17京城**、10/23群山**、
1930年11月	1	鮮満行脚の途次、12/8木浦）
1931年2月	2	「四度朝鮮各地」（2/21、2/22沙里院）
1931年10月	1	「五度目の渡鮮」（10/19公州）
1932年4月	14	「朝鮮へはこれで六度」（4/14釜山、4/15群山、4/16光州、4/17木浦、4/18大田、4/20京城、4/21春川、4/23大邱、4/24鎮海と馬山、4/26兼二浦、4/27平壤、4/28安東、4/29新義州、五月初旬に元山、咸興、咸南、城津、羅南、青洲、会寧、雄基、それから二十二、三日頃まで満州各地、引返し再び朝鮮を経て帰京する筈）
1932年5月	1	5/19公会堂*

演奏旅行の旅程を再構成してみると、「表3）永井郁子の朝鮮演奏旅行」のようになる。

表3の流れを見ると、1930年11月に満州を回った後、12月に再度朝鮮で演奏した可能性が高く、それが永井にとって第3回朝鮮楽旅に当たると意識されたのではないかと推測される。これについては、1930年12月の各地の新聞に当たる必要があるだろう。

1928年の「第一回鮮満楽旅」については、永井郁子『邦訳歌詞問題の前後・転機・反響篇』（噴泉堂、1929）巻末の「永井郁子邦語独唱会年表」（「200回演奏リスト」となっている）に日時と会場名と共演者がリストアップされている。それを見ると、1928年4・5月の演奏旅行はリストの第77回から第94回までに当たり、次の旅程で回っている。すなわち、熊本県人吉町・富久寿倶楽部（4/21夜）、同八代町・八代劇場（4/22昼）、釜山・府公会堂（4/24夜）、大邸・第一小学校講堂（4/26夜）、京城・府公会堂（4/27夜）、元山・公立高女講堂（4/28昼夜）、平壤・府公会堂（4/30夜）、大連・満鉄協和会館（5/4夜）、旅順・昭和園（5/5夜）、奉天・奉天高女講堂（5/7夜）、撫順・撫順高女講堂（5/8夜）、安東・安東高女講堂（5/9夜）、仁川・府公会堂（5/10夜）、門司・基督教青年会館（5/12夜）、大牟田・市公会堂（5/13夜）、久留米・荘島校講堂（5/14夜）、福岡・九州劇場（5/15夜）、和歌山・市公会堂（5/19夜）と目白押しで、その後、5月21日に大阪でラジオ放送に出演したことが同書152頁「ラジオ放送控」に記されている。

その後の第2回から第6回までの鮮満楽旅については、上記表3の情報を手掛かりに今後、調査を進めていくことになる。

4. 演奏曲目

今回の調査で見出した記事の記載内容から、次の3つの演奏会における演奏曲目が明らかになった（「表4）演奏曲目の判明した演奏会」）。中でも1930年10月17日の京城公会堂での演奏会に関しては、『朝鮮新聞』（Nos. 8, 9）に「親しみ深き邦訳歌詞」の見出しで歌詞全文が掲載されており、どのような訳詞で

表 4) 演奏曲目の判明した演奏会

年月日	場所	出典記事
1930-10-7	釜山公会堂	釜山 5
1930-10-17	京城公会堂	朝鮮 7, 8, 9
1932-4-14	釜山公会堂	釜山 18

歌ったかが判明したのは一つの収穫であった⁹。

この3回の演奏曲目を内容別に整理して見ると、次の「表5) 演奏曲目(1)~(6)」のようになる。曲目の内訳として、5-1) はシューベルトやベートーヴェンらの「邦訳歌詞による外国名曲」、5-2) は滝廉太郎(1879~1903)らの「新日本歌謡曲」、5-3) は宮城道雄(1894~1956)作曲の「新筆曲歌謡曲」、5-4) は日本、満州、露国、独国、英国、米国、仏国、伊国の8カ国の有名曲を集めた「各国名曲八曲」、5-5) は永井郁子自身の考案による「淨瑠璃歌謡曲」、5-6) は訪問先の音楽家との協働や地域の好みに合わせた「番外」、以上の6グループに分けることができる。

表 5-1) 演奏曲目(1) 邦訳歌詞による外国名曲

曲名	作編曲	作訳詞	備考
子守歌	シューベルト	堀内敬三訳詞	朝鮮 8 に歌詞
子守歌	ブラームス		
子守歌	モーツァルト	近藤朔風訳詞	
小夜曲	シューベルト	堀内敬三訳詞	
愛しきジヨニイ	英国古謡	近藤朔風訳詞	朝鮮 8 に歌詞
	トステイ	堀内敬三訳詞	
古画に題す	ヴォルフ	メリケ詩	
アベマリア	パツハ作曲、グノー編曲		朝鮮 9 に歌詞
われ御身を愛す	ベートーヴェン	堀内敬三訳詞	朝鮮 8 に歌詞
神のみいづ	ベートーヴェン	近藤朔風訳詞	
鱒	シューベルト	石倉小三郎訳詞	朝鮮 8 に歌詞
野ばら	シューベルト	堀内敬三訳詞	

9 歌詞全文があるものについては、以下の「表5) 演奏曲目」の備考欄に「朝鮮 8 に歌詞」といった形で注記している。歌詞そのものは紙面の都合上、割愛した。

表 5-2) 演奏曲目 (2) 新日本歌謡曲

曲名	作訳詞	作編曲	出典記事
秋の月	瀧廉太郎	瀧廉太郎	朝鮮 18
出船	勝田香月	[杉山長谷夫]	朝鮮 18
ふる里	金城栄治	[宮良長包]	朝鮮 18
春の月	高安月郊		朝鮮 18
京のいとはん		高●亮●	朝鮮 18
画の夢		高●亮●	朝鮮 18

表 5-3) 演奏曲目 (3) 新箏曲歌謡曲

曲名	作訳詞	作編曲	備考
母の曲	西條八十作歌	宮城道雄作曲	朝鮮 9 に歌詞
若水	島崎藤村作歌	宮城道雄作曲	朝鮮 9 に歌詞
うわさ	西條八十作歌	宮城道雄作曲	
秋の歌	西條八十作歌	宮城道雄作曲	
せきれい	北原白秋作歌	宮城道雄作曲	朝鮮 9 に歌詞

表 5-4) 演奏曲目 (4) 各国名曲八曲

国名	曲名	作編曲	作訳詞	備考
日本	さくらさくら 姫松小松	日本古謡 日本古謡	日本古謡 日本古謡	
満州	娘々祭	園山民平編曲	南満州民謡	朝鮮 8 に歌詞
露国	雁の叫び バラと少女	ヴォルガ船曳唄	旗野十一朗訳詞 永井郁子作	
独国	折ればよかつた	ブラームス	高野辰之訳詞	朝鮮 8 に歌詞
英国	故郷の廃家 美しき	ヘース スコットランド民謡	犬童球溪訳詞	
米国	オールド ブラック ジョオ ミネトンカの湖畔にて	フォスター [アメリカ民謡]	小泉冷訳	朝鮮 8 に歌詞
仏国	悲歌 小夜楽	マスネ グノー	二見孝平訳詞	朝鮮 9 に歌詞
伊国	サンタルチア 眼りしニーナ	ナポリ民謡 シシリイ島民謡	堀内敬三訳詞	朝鮮 8 に歌詞

表 5-5) 演奏曲目 (5) 浄瑠璃歌謡曲 (永井郁子案)

曲名	作訳詞	作編曲	備考
義太夫「阿波鳴門」中の巡礼歌	藤山●●●歌		朝鮮 9 に歌詞
義太夫「三十三間堂」中の木遣音頭			朝鮮 9 に歌詞
義太夫「朝顔日記」中の朝顔の歌	熊澤審山作歌		朝鮮 9 に歌詞

表 5-6) 演奏曲目 (6) 番外

曲名	作訳詞	作編曲	出典記事
月待草	村田米作歌	釜山高女山田早枝作曲	釜山 5
白鳥	小松清作歌	山田早枝作曲	釜山 5
龍峡小唄	白鳥省吾	[中山晋平]	釜山 18
唐人お吉	西條八十	[中山晋平]	釜山 18
肉弾三勇士	渡邊栄伍	[古賀政男]	釜山 18

表 6) 3つの演奏会のプログラム構成

年月日	場所	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	プログラム構成順
1930-10-7	釜山公会堂	○		○	○	○	○	1+6+3+4+5
1930-10-17	京城公会堂		○		○		○	2+4+6
1932-4-14	釜山公会堂	○		○	○	○		1+4+3+5

これら6つのグループ (P1 から P6 まで) の内、実際の演奏会でどれが歌われているかを「表 6) 3つの演奏会のプログラム構成」に示す (P1 = 邦訳歌詞による外国名曲、P2 = 新日本歌謡曲、P3 = 新箏曲歌謡曲、P4 = 各国名曲八曲、P5 = 浄瑠璃歌謡曲、P6 = 番外)。

表 6 から読み取れる要点として、プログラムの一番根幹を成すのは「4) 各国名曲八曲」で、これほどこの会場でも欠かさず歌われている。その際、日露英米仏伊の 6 カ国については候補曲が複数あり、その中から 1 曲が歌われるという形であった。なお、「娘々祭」は南満洲民謡で、園山民平 (1887-1955) の編曲によって、小学校 3 年生用の『満州唱歌集』(1932-3) に小学生版が、また女学校等の教科書として用いられた『満州新中等唱歌』(1927) に女学生版

が掲載されていた曲であるが¹⁰、曲調と聴衆層から、永井郁子が歌ったのは女学生版だったと思われる。

次に、「3）新箏曲歌謡曲」と「5）浄瑠璃歌謡曲」は、箏や尺八といった邦楽の共演者が得られる場合に取り上げられており、そうでない場合は、ピアノ伴奏で演奏可能な「2）新日本歌謡曲」が歌われる。

興味深いのは「6）番外」で、地元の音楽家（「釜山高女山田早枝」）の書いた歌や、上海事変（1932年2月）の英雄とされた「肉弾三銃士」といった当時の人気の歌を取り上げていることが浮かび上がってきた。

5. 「君が代」を歌う

今回の42点の記事の内、最も問題が多いのは「『君ヶ代』を／皆様と歌ふのが／楽しみであります／釜山にて、永井郁子女史語る」（1932-4-16、釜山23）である。ここでは次のように語られている（下線は引用者）。

朝鮮へはこれで六度まいります。今回こそ雄基、会寧、城津、咸興、咸南、開城、春川、兼二浦青洲など未踏の地でも親しく歌 [ひ] かけて、そして会の最後には例によつて『君が代』を皆々様と御一緒に朗らかに高らかに歌ひ上げます事を楽しみにして居ります。『君が代』といへば最初伺つた頃はどうも朝鮮の方々の中座なすつたり反つぽを向かれたのには物足りなく思はれましたが、それがどうでせう、昨年十月まいりました時には皆様極めて厳かに合唱されたのには本当に有難く存じました。此の端的な現はれこそは我国民が総立ちとなつて、内鮮人に対してあらゆる横暴の限りを尽した支那軍ばつを徹底的にこらしめた賜ものであつて、取りも直さず皇軍の忠勇と義憤とが魂し [ひ] から魂し [ひ] へ、心から心へと通じた朝鮮の皆々様の表徴であらうとしみじみと考へさせられたのでご [ざ] います。

10 喜多由浩、2003、46-49頁。小学生版は同書120-121頁、女学生版は134-135頁。

邦語独唱会の終わりに聴衆と共に「君が代」を歌うという取り組みを、永井郁子がいつ始めたのかは目下、不明であるが、この記事が書かれた1932年の時点では慣例となっていた様子が窺われる。文中の「最初伺つた頃」が「第一回鮮満楽旅」を指すとするならば、1928年4月には実践していたことになる。

この時代は、「開館の初めに『君が代』を上映 全国一帯に実行」（東京朝日新聞、1930-4-24）、「議會開院式の『君が代』奉唱 貴族院で採択に決る」（読売新聞、1934-3-14）、「君が代を教科書に〔文相の意見で小学5、6年生用の国定教科書に掲載〕」（東京朝日新聞、1936-7-2）といった記事が増えていく時期に当たり、実際、永井郁子も1940年10月21日の軍人会館における「国歌君が代60周年奉祝記念大会」に招かれて「感想談」を述べた一人となっている¹¹。

また、政治家の永井柳太郎（1881-1944）の記名記事「永井郁子さんの仕事」が1932年4月13、14日の2回に分けて『釜山日報』に掲載されている（Nos. 17, 19）のも注目される。永井柳太郎は、憲政会の論客として人気の高かった政治家で、執筆当時は民政党の幹事長を務めていた¹²。文中に「私が郁子さんに初めてあつたのは、一昨年、奉天でその邦語独唱を聴いた時である」とあるので、1930年秋の奉天での演奏会（月日等未詳）で知己を得たものと考えられる。上述の「邦語運動重要年表」（1932）によれば、1932年3月1日の日比谷公会堂での「邦語独唱五百回記念大会」に「永井柳太郎氏来会『永井女史ノ邦語運動ニツキ』ト題シ熱演セラル」とあり、『釜山日報』の記事はその内容を伝えるものと考えることができる。

6. おわりに

今回の調査では、『釜山日報』に24点、『朝鮮新聞』に13点、『毎日申報』に5点、計42点の記事を見出し、そこから永井郁子の邦語独唱会をバックアップした朝鮮の新聞各社の動き、6回に及ぶ永井郁子の朝鮮演奏旅行の大まかな輪

11 『東京朝日新聞』1940年10月21日（月）朝刊3面1-3段「君が代を祝ふ、六十周年記念」。

12 『永井柳太郎』編纂会（編）、1959、巻末の年表による。

郭、演奏曲目の組み立て方、聴衆との「君が代」斉唱という問題、保守政治家との繋がりといった事柄が明らかになった。

永井郁子が邦語歌唱運動を展開した時期（1925～1941年）は、日本が朝鮮や満州、台湾に対する植民地主義を強力に推し進めた時期に当たり、その中で文化的民族主義を掲げた永井の活動は、当時の音楽家の活動のあり方として多義的な問題を孕んでいる。吉原真里が指摘するように¹³、「演奏というものは、自らの民族的・国家的・文化的なアンデンティティーを示すための、政治的・文化的・芸術的に強力な道具として機能する」ものであり、永井郁子の場合に、これらがどのような機能を果たしたかという問題を避けて通ることはできない。今後、実態解明の調査を進めると共に、この問題にも取り組んでいきたい。

参考文献

- 井川充雄 2017『戦前期「外地」雑誌・新聞総覧―朝鮮・満州・台湾の言論界』第4巻：朝鮮・満州編②、金沢：金沢文庫閣
- 喜多由浩 2003『満州唱歌よ、もう一度』東京：扶桑社
- 金泰賢 2017「植民地朝鮮の日本人新聞『釜山日報』と植民地都市「釜山」」, *Global-local studies* 10: 15-29
- 津上智実 2014「朝鮮の諸新聞に見るピアニスト小倉末子の京城演奏旅行（1916年12月）」神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』28: 93-113
- 永井郁子 1929『邦訳歌詞問題の前後・転機・反響篇』東京：噴泉堂
- 永井郁子 1932『邦語歌唱十六講・いばらの道』東京：噴泉堂
- 『永井柳太郎』編纂会（編）1959『永井柳太郎』東京：勁草書房
- 中村明星（編輯）1937『満州・朝鮮・新聞現勢』大連：新聞解放満鮮総支社
- 日本電報通信社編『新聞総覧』大正6年版（1917年）
- Yoshihara, Mari, 2004. 'The Flight of the Japanese Butterfly: Orientalism, Nationalism, and Performances of Japanese Womanhood', *American Quarterly*, 56-4: 975-1001
- 李相哲 2009『朝鮮における日本人経営新聞の歴史（1881-1945）』東京：角川学芸出版

13 'the performances function as a powerful political, cultural, and artistic tool for asserting their racial, national, and cultural identities.' Yoshihara, Mari, 2004, pp. 976-977.

記事一覧（１）『釜山日報』の永井郁子関連記事（24件、写真3件）

1）1928年5月13日（日）4面2-3段「音楽の旅を了へ／永井郁子女史／九州路へ向ふ」 先月二十四日釜山公会堂に独唱会を開催して非常に感銘を興へた邦訳歌詞の歌ひ手永井郁子女史は其の後奉天から大連、旅順の方面を演奏旅行中の所松浦氏や大平嬢同伴十一日夜釜山通過九州路に向かつたが船中にて語る／全く忙しい旅で印象とか感想とか言ふ物は殆ど受ける暇がありませんでした。大連の方でも大変成功を収めました、奉天あたりでは砂塵で咽喉を痛めて困りました。明日、晩はすぐ門司で、それから福岡の方を廻り大阪で放送して帰りますが、又今秋あたり招かれて来る事になるかも知れません。今度はもうすこしゆつくりした気分で旅行したいと思つて居ます。

2）1930年9月19日（金）4面6-7段「永井郁子女史／独唱会／来る十月八日本社後援の下に／釜山にて盛大に開催」 あらゆる佳き歌を、われらの言葉「日本語」もて、歌はしめよ、「日本のために…」これは独唱家永井郁子女史がわれらに呼びかけた楽人としての生命の滴りである、永井女史はかつては帝劇の囑託、日蓄の顧問として『自国を愛しませう』『歌を以て世を護る』の二語を信条として新しい世界を開いて来た人で、世界の名曲を日本語で歌ふと言ふ所に女史の真価は認められ又伴奏に箏や尺八や三絃等の純日本楽器を採用したことも独自の境地を持つ人である、先年釜山へ初めて演奏旅行の旅を伸べた時も非常な人気であつた、それから数年たつた女史の芸術は今や本邦楽壇に白光を放っている。この時釜山メソヂスト教会では本社後援の下に来る十月八日同女子〔史〕^註を迎へて独唱会を開くことになつたが前回に増して同好家の期待は深い、釜山楽壇秋の収穫として一大盛況を告げるであらう。因に永井女史の持つ各国名歌曲は二百曲目を数へられているが今大会には子守唄三つ、小夜楽三つ各国名曲八つ位を選び更に宮城道雄氏作曲、新箏曲歌謡曲から三つ位、杵屋佐吉氏の新作小品及長唄曲から二つ位。義太夫曲と長唄曲は女史考案のものであるから一つ位は是非プログラムに挿入すべく準備されているので同好家の期待は素晴らしいものがある。

3）1930年9月22日（月）2面4-7段「待たるる／永井郁子女史／独唱会の夕／来月八日公会堂」 メソヂスト釜山教会主催、本社後援の永井郁子女史独唱会は既報

（注）記事中の誤字脱字を補つたものを〔 〕、解説不明箇所を●で示す。

の如く来月八日午後七時半より釜山公会堂に於て開催されるが永井女史が邦楽壇にうち立つた霸王樹は今や枝太り葉茂りて全国同好家渴仰の樹となつている。日本人が日本語を使ふことが段々下手になりつつある時日本人は日本の言葉に生きやうと言ふ健気な望みを抱き世界の名曲は之を悉く邦語に訳して自己〔家〕葉籠中のものとし更に伸びて伴奏楽器に尺八、三絃をとり入れ宮城道雄氏の新日本音楽曲はもちろん長唄、浄瑠璃に手を染め今回の出演にも長唄の伴奏として杵屋の新進を同伴することとしたなどそれに釜山の同好家とは馴染もあり日蓄以来のファンも多いこととて非常な人気である。会員券は普通一円五十銭、子供学生七十銭で前売に限り普通一円二十銭、学生子供五十銭であると。

4) 1930年10月7日(火) 4面7-9段「日本人は日本／の言葉で歌ふ／永井郁子女史独唱会／日時十月八日夕／会場釜山公会堂／各国の名曲／新日本音楽／浄瑠璃・長唄／主催メソヂスト釜山教会／後援釜山日報社」

5) 同8-9段「愈よ明日／永井郁子女史／独唱会の夕／期待する満港ファン」 全釜山の同好家とファンに待ち侘らされている永井郁子女史の邦語独唱会は女子〔史〕の楽壇に馳せつつある声誉と釜山メソヂスト共励会員や川崎陶器店主等の奔走で人気の渦を巻きつつ遂に明八日夕に迫つた、同女史が独歩の境地を開いて欧風唱歌に心酔した人々の夢を破つた事は有名な話で歌手としての女史は釜山出演の其後飛躍的に完成に近づいて居り深く期待されている、殊にプログラムも前発表のものとは幾分変更され興趣百パーセントのものとなつているので一層の人气が煽られ大盛況を予想されている、会員券は既報各方面で売り出されているが前売は普通一円五十銭を一円二十銭に学生七十銭が五十銭に割引されているから当日求められるよりも都合がよいであらう、尚変更されたプログラムは左の通り／～曲目番組～△第一部／一、ピアノ独奏…藤井光子 (A) 夜曲…シヨパン作曲 (B) 前奏曲…メンデルスゾーン作曲／一、子守歌三曲 (一) シューベルト…堀内敬三訳詞 (二) プラームス… (三) モツアルト…近藤朔風訳詞／一、小夜曲 (四) シューベルト…堀内敬三訳詞 (五) イトシキジヨニイ…近藤朔風訳詞 (六) トステイ…堀内敬三訳詞／休憩／番外 (あ) 月待草…村田米、作歌、釜山高女山田早枝作曲 (い) 白鳥…小松清作歌、岡山田早枝作曲 (う) 古画に題す…メリケ詩、ヴオルフ作曲 (え) アベマリア…バツハ作曲、グノー編曲／休憩／△第二部／一、新箏歌謡曲四種 (一) 母の曲…西條八十作歌、宮城道雄作曲 (二) 若水…島崎藤村作歌、同作曲／休憩／各国各曲八曲 (日) さく

らさくら日本古謡（満）娘々祭…園山民平編曲、南満州民謡（露）雁の叫び…ヴォ
ルガ船曳唄、旗野十一朗訳詞（独）折ればよかつた…ブラームス作曲、高野辰之訳
詞（英）故郷の発塚…ヘース作曲、大童球溪訳詞（米）オールド プラツタジヨオ、
フォスター作曲（佛）悲歌…マスネ作曲、二見孝平訳詞（伊）サンタルチア…ナポ
リ民謡、堀内敬三訳詞（三）うわさ…西條八十作歌、同作曲／休憩／一、浄瑠璃歌
謡曲三種（永井郁子案）（イ）義太夫「阿波鳴門」中の巡礼歌（ロ）義太夫「三十
三間堂」中の木遣音頭（ハ）同「朝顔日記」中の朝顔の歌／以上ピアノ伴奏藤井光
子、箏伴奏日比孝子、尺八助奏福井葉山長唄三味線杵屋作枝、義太夫三味線鶴澤
玉七

**6）1930年10月8日（水）4面7-9段「日本人は日本／の言葉で歌ふ／永井郁子女
史独唱会／日時十月八日夕／会場釜山公会堂／各国の名曲／新日本音楽／浄瑠璃・
長唄／主催メソチスト釜山教会／後援釜山日報社」**

**7）同8-9段「永井郁子女史／独唱会の夕べ／愈よけふ／公会堂に於て／ファンの
熱狂を呼ばん」**『日本人は日本の言葉をもつて歌へ』と叫んで楽壇から異端者扱ひ
されたのに屈せず遂に今日の地盤を擁して天馬空の人気を背負っている吾等が永井
郁子女史はいよいよ満港ファンの深い期待裡に今八日午後七時より釜山公会堂に於
て思ひ出深き第二回目の独唱会に臨むこととなつた同女史によつて歌はれる各国の
名曲から日本の俗謡まで二十六曲目、伴奏及び助奏にはピアニスト藤井光子氏、箏
は釜山の日比孝子氏、尺八は同じく釜山の福井葉山氏それに浄瑠璃歌には同じく釜
山の某名手が出演することになつてこの独唱会は一段と栄あるものになり人気は沸
騰して来たから今夕の公会堂は永井女史をめぐつて満員の盛況を告げるであらう。
因に永井女史は七日朝下関より関釜連絡線に乗込み同夕出迎したメソチスト教会
員、川崎陶器店主その他多数のファンに取り巻かれて上陸所定の宿所に入つたが一
夜静養して今日の独唱会に臨む筈。

**8）1930年10月9日（木）2面3-4段「永井女史／独唱会／九日夜七時より／鎮海
高女講堂で」** 音楽界の女王と称される永井郁子女史は九日夜七時より鎮海高等女
学校講堂に於て独唱会を催す事となつたが女史独特の麗朗微妙なる韻律に一般聴衆
を魅了するであらう（鎮海）

**9）同4-5段「馬山高女校主催の／永井女史独唱会／琴、尺八等の邦楽助奏／前人
気大に沸騰す」** 馬山高等女学校では本年恰も創立十五周年に相当し其の記念とし

て帝都楽壇の女王永井郁子女史を招聘し独唱会を十日午後六時より馬山小学校講堂に於て開催する事となつた。郁子女史は帝都楽壇の女王として既に定評あり同女史に依つて歌はるる欧米各国の名曲が如何に聴衆へ感動を興へるか、初秋の夕を飾る本演奏会は藤井光子女史の伴奏と相俟つて大盛況を予想されて居る。尚主催者側では本会を層一層盛会ならしめる薦め都山流尺八馬山菅野梢山氏、琴大授道釜山小河内好枝嬢の来援を乞ひ助奏する事となつたので人気は彌か上にも沸騰して居る。而して会費、釜山の大人一円五十銭を特に一円となし学生五十銭として同校同窓会員の前売券に限り三割引を以て前売する事となり純益金は同校講堂新築費基金に編入する事となつたので其の主旨に賛同し前売券の売行も頗る良好との事である。馬山としてはかかる斯界の権威者が来馬した事のない土地柄丈けに府内は勿論附近の各地からも多数来会する模様である。馬山湾港に流るる妙音妙技は蓋し聴衆を陶醉せしむるものがあるう（馬山）

10) 1930年11月3日(月) 5面2段「楽壇の明星／永井郁子／来月八日頃来木」（本浦）我国声楽界にて藤原義江関屋敏子と共に名声高きソプラノ歌手永井郁子女史は鮮満行脚の途次来月八日頃木浦を訪れファンの薦めソプラノタを催すべく木浦運動協会及び女学校で葉会等が主催となつて計画中であると

11) 1932年4月9日(土) 4面8-10段「楽壇の明星／永井郁子女史／邦語独唱会／十五日の夜公会堂にて／日本のために一唄ふ」 先に世界の歌姫宮川美子嬢を聘して愛陶機『朝鮮号』建造献金独唱会を開催して盛況を見た本社では今また我国楽壇に不滅の光を輝かして居る明星の如き声楽家永井郁子女史の来鮮を迎えて来る十五日午後六時から釜山公会堂に於て同女史が『世界のあらゆる佳き歌をわれらの言葉日本語もて歌はしめよ日本のために一』といふ信念のもとに麗朗玉の如き声もてうたふ我国古来の各地民謡や日本新歌謡、各国名曲或ひは義太夫歌謡曲などの邦語独唱会を主催することに決定。永井郁子女史は美しきピアノ伴奏者角田芳子嬢を同伴関西、山陽の独唱の旅を経て十五日朝の連絡線で来釜し同夜の公会堂に於ける独唱会に同女史が提唱する大和言葉もて世界のあらゆるよき歌を唄ふ筈である。

12) 1932年04月11日(月) 2面10-11段「永井郁子女史の／邦語独唱会／十四日の夕公会堂」 現代女流楽壇の明星永井郁子女史の邦語独唱会は既報の如く本社主催の下に来る十五日釜山公会堂に於て華華しく開催される事になつていたが、その期日を都合により十四日午後六時に変更する事にした。今回は特に我国古来の各地民

謡、各国名曲義太夫等の純日本声楽独唱であり佳人角田芳子嬢の伴奏と共に釜山趣味人の期待に余るものがあらう。

13) 1932年4月12日(火) 4面8-10段「期日十四日(木曜日)午後六時半／場所釜山公会堂／永井郁／子女史／邦語独唱会／会員券大人一円(前売八十銭)学生五十銭(同四十銭)／会員券は各楽器店で販売す／主催釜山日報社」

14) 同8-10段「日本の為に／美音で唄ふ／永井郁子女史独唱会／愈よ十四日夜公会堂で」 邦語独唱の旗印を押立て楽壇に明星の如き輝きを見せて居るお馴染の声楽家永井郁子女史の邦語独唱会を来る十四日午後六時半から釜山公会堂に於て本社主催の下に開催する。麗朗円熟し切つた永井郁子女史が『世界のあらゆる佳き歌をわれ等の言葉日本語もて歌はしめよ日本のために』の信念をもつて我国各地の民謡や外国歌の邦訳詞或ひは日本の伝統的古典芸術の粹ともいふべき浄瑠璃歌曲を得意の美音をもつて唄ふので永井郁子女史邦語独唱会は嘗の宮川美子嬢献金独唱会以上の人気で音楽同好趣味を喜び待たせている。会員券は大人一円(前売八十銭)学生小人五十銭(同四十銭)で左記各商店で発売している。[会員券発売所：上田楽器店(弁天町)、田中楽器店(同)、棚橋商店(草築町)、松村薬局(大鵬町)、二葉屋文具(同)、三光堂(富平町)、ミカド食料品店(幸町)、津村土産品(大倉町)、呉竹書店(南浜入口)、本社営業部]

15) 1932年4月13日(水) 4面8-10段「文面は13)に同じ」

16) 同8-10段「聴け！永井女史／邦語独唱会／愈よ明十四日公会堂で／人気の焦点となる」【顔写真】 久しく待望された我が楽壇の最高峰、永井郁子さんが双年振りに来鮮、明十四日午後六時半から釜山公会堂のステージで本社主催のもとに邦語独唱会を開く、言葉の明晰さ、音程の確さ、歌廻しの甘さ、かてて加えてこよなき美声—それだけでも永井郁子の存在は我楽壇の明星である。泰西高踏音楽の大衆化を目論見、つとに邦訳歌詞問題を提唱し凡百の楽敵を蹴散して悪戦苦闘実に七年、楽壇切つての女丈夫たる彼女が伴奏に箏、尺八、三絃、大棹などの純日本楽器を採用して我国三千年培はれた独自のメロディーを正しき洋楽の音階にのせて、和洋楽壇に幾多の暗示を興へたパイオニア、世界的とか何々教授とかいふハンデギヤツプなしの真正正銘の我が楽壇の第一人者永井郁子女史である。曩に若き声楽家宮川美子嬢を迎えた半島楽壇は今また永井郁子氏を迎えて独唱会を開くことは花爛漫の春にふさはしい朝鮮の大収穫であらう。永井郁子さんが明晩公会堂で歌ふプログ

ラムは世界のあらゆる佳き歌を邦訳した歌詞、我が国各地の民謡浄瑠璃、歌曲などで就中肉弾三勇士の歌は唐人お吉などの小唄と共に人気の焦点とならう。会員券は大人一円（前売八十銭）学生小人五十銭（同四十銭）府内著名楽器店その他で発売している。

17) 同8-10段「永井郁子さんの仕事」(永井柳太郎) 何故、私が永井郁子さんの独唱会に祝辞を述べるか—郁子さんの姓が永井で、私の姓も永井であるところから、或は二人の間に何か姻戚関係があるのではないか、と思はれ易い／実際、二人を兄妹であらうと思つて「あなたはいいお妹さんをお持ちで」とお祝ひの言葉を述べた者もあつた。しかし私は郁子さんの兄ではない。甚だしい人になると「あなたの奥さんは有名な音楽家ださうで、立派な奥さんをお持ちで、あなたもお幸せですね」と言つた。しかし、郁子さんは私の奥さんではない、したがつて私は郁子さんの旦那様ではない。故に楽屋内から太鼓をたたくのではないのである／それでは、二人の間は何でせうか—私は郁子さんの単なるファンの一人である！それも、顔を見ない前からの、歌を聴かない前からのファンであつた。そして一日も早く会つて見たいと思つていた、何故であるか、永井郁子さんの音楽は、日本の魂を、日本語で大衆に向つて歌ふからである。邦語独唱といふことに対しては、或は非難もあらう、攻撃もあらう、嘲笑する人もあるであらう。然も、郁子さんは、自分は日本人である日本人として歌ひ、日本人の喜び悲しみを、如実に表現しようと努力している。その努力に対しては郁子さんを知ると知らざるとに関係なく、自づと尊敬しないではいられない。私が郁子さんに初めてあつたのは、一昨年、奉天でその邦語独唱を聴いた時である／固より偉大なる作曲は、歌詞がなくとも、凡ての民族の魂に触れる力がある。それは魂から魂へ、心から心へ通じ、凡ての人々に喜びを興へ、悲しみを伝える。然しながら、歌曲の鑑賞に於て歌詞といふものが、どれ位大きい意味を持つかは論ずるまでもない。即ち、その曲が理解出来る言葉によつて歌はれると否とでは、その間、非常に感じが違つて来る／ひるかへつて我が国の現状を見ると、今や凡ゆる階級が音楽を要求している、資本家も労働者も、男も女も、音楽を求めている。それは、現実世界から逃れて、何かしら慰安と理想とを見出さうとしそこに音楽の必要が起つて来るのである。その音楽とは、日本人の魂に最も触れるところの、日本語によるものでなければならぬ／由来、日本人は外国語を尊敬する外国語の習得には、多大の努力を払つている。さうして、或る程度までの理解

を持つている。しかし真に外国語を理解して、その妙諦を味ふことは容易ではない。私の知つている或る外人宣教師は、永く日本に滞在し、日本語も達者であつた。その外人が或る時、日本語で、相手を非常に尊敬して呼ぶとき、何と言ふかと尋ねたので、それは「閣下」と言ふと答へた。すると、その外人は私の知つている労働者は、自分の妻にも、そう呼んでいると言つた。成るほど「嬢」は「閣下」と発音が似ているので、この誤りをしたのである。又、これは外務省の彼〔役〕人の話であるが、外国語の知識には特に秀でていた或る有名な外交官が、外国に行つて、街を歩いていると、あちらにも、こちらにも、ガレーヂーといふ看板が出ていたそれが余り多いのでその人は案内人に向つて「ギヤレヂ氏といふのは余程の大資本家だと見えるね」と言つて、その案内人を面食はせたそうである。これらの例に見ても、外国語をその国の人と同じに味ふことは容易ではない。従つて自分の理解出来る言葉と、そうでない言葉とではかん激の深さ、強さ、に非常の差が生じて来る（つづく）

18) 1932年4月14日(木) 4面4-9段「愈よ今夜／永井郁子女史／邦語独唱の夕べ／午後六時半から公会堂にて／素晴らしい前人気」 待望久しき我等が楽壇の最高峰永井郁子氏が音楽ファンの割るやうな人気を浴びて今十四日午後六時半から本社主催のもとに釜山公会堂に於て開く邦語独唱会に円熟麗朗の美声を揮ふことになつてゐる。永井郁子氏が今宵美しき角田芳嬢のピアノ伴奏にて独唱する歌は全国民の熱血を湧き立たしめた『肉弾三勇士』の唄を初め『唐人お吉』や『龍峡小唄』『京のいとほん』などの情緒なまめかしい小唄或は日本古謡の『姫松小松』満州民謡の『娘々祭』から英国スコットランド民謡の『美しき』米国の『ミネトンカの湖畔にて』佛国ユーゴー原詩『グノー小夜楽』伊国シシリイ島民謡『眠りしニーナ』ロシア民謡『バラと乙女』ドイツ小唄『折ればよかつた』などの各国代表の名曲を永井郁子氏が邦訳歌詞としたもので邦語独唱会は素晴らしい期待を以て迎へられて居る。本社その他府内の田中楽器店（弁天町）、上田楽器店（同）、松村薬局（大鵬町）、二葉屋文具店（同）、三光堂書店（富平町）、ミカド食料品店（幸町）、津村土産品店（大倉町）、呉竹書店（南浜入口）、棚橋商店（草築町）／九著名各商店で発売している会員券は飛ぶが如き売行を示し今から其の盛況を予想されているが同夜のプログラムは左の如くである。／△新日本歌謡曲（六種）（一）秋の月…瀧廉太郎作（二）出船…勝田香月作（三）ふる里…金城栄治作（四）春の月…高安月高郊作（五）京

のいとはん…高●亮●作（六）画の夢…同上△各国名曲（日）姫松小松…日本古謡（満）娘々祭…満州民謡（露）バラと少女…永井郁子作（独）折ればよかつた…高野辰之作（英）美しき…スコットランド民謡（米）ミネトンカの湖畔にて…小泉冷訳（佛）グノー小夜楽…ユーゴ原詩（伊）ニーナ…シシリイ島民謡△特別番外（一）龍峡小唄…白鳥省吾作（二）唐人お吉…西條八十作（三）肉弾三勇士…渡邊榮伍作

19) 1932年4月14日(木) 4面8-10段「永井郁子さんの仕事(二)」(永井柳太郎)

凡ゆる民族には、その民族独自の個性がある。それは個人の場合でも同じで、その個性があるために人間は各々独自の天分が興えられている。民族も亦、その個性に基づいて、各自に独自の要求があり使命があり、魂がある。而して民族の個性を遺憾なく發揮し、その要求を自由に叫ぶところに、その民族独自の文化が生れる。例へば此処にあるピアノの鍵盤にしても高低強弱があつてこそ音楽となる若し、一つの音しか出ないとすれば音楽は成立しない。高低強弱の音が一脈の調和を保つところに音楽が可能となるのである。或は、野の花にしても、凡ての花が梅か桜の様な花であつたならば、如何に単調で淋しいものであらうか梅があり、桜があり、牡丹があり、バラがあり、ダリヤがあり—といつた変化があつてこそ、天地の美がある。それと同じに、民ぞく [ママ] にも個性があり、特有の言葉があり、独自の音楽がある。その特異性、自由に伸々と發展させるところに世界の文化が興る／永井郁子さんは、その意味で、日本の文化を興さうとしていられると思ふ。様々な非難を排し、自からの信ずる所に従つて、自由に歌はうとするのは、日本文化の建設に資することである。私は郁子さんを、日本文化建設者としての人格を認めて、及はずながら後援しているのである。その意味で私は郁子さんの理想が伸々と發展することを祈るものである／何れの国を問はず、偉大なる芸術家は、容易に認められるものではない、かの偉人なる作曲家モツアルトでさへ、生涯を不遇に送り、死んで墓場に送られる時、殆んど会葬者はなかつた。この大芸術家のはかは、今日どこにあるかさへ不明である。然も、その業績は不朽であつて、潔然と輝いている、郁子さんの邦語独唱も今日色々な非難、攻撃、嘲笑があると思ふ。然も、勇敢に闘つていられるその勇ましい闘ひ、貫き理想、精神、意気に対して、私は満腔の敬意を表するものである。そこにファンの一人としての私の希望がある／今夕御來場の皆様も、どうぞ私同様、ファンとして永井郁子さんの仕事を見守つてやつて頂きたいのであります（をはり）

20) 1932年4月15日(金) 4面6-7段「来鮮した声楽家永井郁子女史(左)と伴奏角田芳子女史(右)」【写真】

21) 同8-9段「永井女史の／独唱の夕／徂く春の夜のしじまを／玲瓏の声に聴衆酔ふ」 半島音楽ファンの待望久しき我楽壇の明星たる永井郁子女史は美しきピアノ伴奏者の角田芳子嬢を同伴して十四日朝の連絡線で来鮮、同好者の盛んなる出迎えを受けて直にステーションホテルに入り旅の疲れを慰して同夜午後六時半から公会堂に開催の邦語独唱会に出演、麗朗円熟の美声を揮つて新日本歌謡曲、各国各曲、我国の小唄民謡並に呼物の肉弾三勇士を歌ひ会場を埋め蓋した一千の音楽ファンを感激魅了し和やかな春宵を香り高い芸術の雰囲気に陶醉せしめて顧る盛会であつた。

22) 同9-10段「永井女史の／独唱会／十五日は群山」 十四日夕釜山公会堂の独唱の夕べに天来の麗音を以てローカルな民謡を始め名曲を歌つた永井いく子女史は今十五日は群山に於て出演十六日は光州の予定になつている。

23) 1932年4月16日(土) 4面6-9段「『君ヶ代』を／皆様と歌ふのが／楽しみであります／釜山にて、永井郁子女史語る」 朝鮮へはこれで六度まいります。今回こそ雄基、会寧、城津、咸興、咸南、開城、春川、兼二浦青洲など未踏の地でも親しく[ひ]けて、そして会の最後には例によつて『君が代』を皆々様と御一緒に朗らかに高らかに歌ひ上げます事を楽しみにして居ります。『君が代』といへば最初伺つた頃はどれも朝鮮の方々が中座なすつたり反つばを向かれたのには物足りなく思はれましたが、それがどうでせう、昨年の十月まいりました時には皆様極めて厳かに合唱されたのには本当に有難く存じました。此の端的な現はれこそは我國民が総立ちとなつて、内鮮人に対してあらゆる横暴の限りを尽した支那軍ばつを徹底的にこらしめた賜ものであつて、取りも直さず皇軍の忠勇と義憤とが魂し[ひ]から魂し[ひ]へ、心から心へと通じた朝鮮の皆々様の表徴であらうとしみじみと考へさせられたのでございませう。も一つ朝鮮の方の話、之は広島で最近聞い[た]事ですが、満州への出征軍人の見送りに際し、朝六時頃広島島の朝鮮人達が近所の内地人を片つ端から呼び起して見送りに間に合ふやうに注意されたさうです。真の内鮮融和などといふ事は、こうした非常事に共存共栄の自覚によつて培れるのではないでせうか。

尚私達の今回の楽旅は恐らく鮮満各地に於ける最後のものので日程は大体左の通

りでございます。十六日光州、十七日木浦、十八日大田、二十日京城、二十一日春川、二十三日大邸、二十四日鎮海と馬山、二十六日兼二浦、二十七日平壤、二十八日安東、二十九日新義州、五月の初旬に元山、咸興、咸南、城津、羅南、青洲、会寧、雄基それから二十二、三日頃まで満州各地、引返し再び朝鮮を経て帰京する筈でございます。

24) 1932年4月16日(土) 4面6-8段「永井郁子女史独唱会の盛況(公会堂)【3段抜きの写真】

記事一覧(2) 『朝鮮新聞』の永井郁子関連記事(13件、写真6件)

1) 1928年12月21日(金) 3面1-2段「声楽家永井郁子さん／浄瑠璃の研究」 女流声楽家中の第一人者永井郁子さんは今度思ひ切って日本音楽への進出を企て日本人は日本人の血と肉のもられた歌曲を唱ふのが本当だといふ見地から邦語独唱を盛んに主張しているが、遂に義太夫といふ古典芸能から永遠性のある美しいものを提出歌唱して世に問はんと最近斯界の巨匠豊澤亀之助氏について浄瑠璃の研究中である。洋装で見台に向った姿は定めし見事であらふとかなり評判になっている【写真はお稽古中の左永井女史と豊澤師匠右】

2) 1930年10月4日(土) 4面4-5段「永井郁子女史／元山高女で独唱／来る十三日頃来元」(元山) 元山におなじみ深い声楽界の花形永井郁子女史は朝鮮漫遊する途次再び来る十三日頃来元の由、この機会に元山高女では同女史を迎へて女史独特の洋曲を邦語で独唱する即ち同女史の『大和には大和言葉あり、我は歌ふ山の奥にも島の果てにも』の如く新日本音楽の普及さるるに及んで何れもの曲目を全く邦語を以て歌って行く最も新しき進歩の人で歌ふところ何れも邦楽の妙音あふれ、それに義太夫箏歌等を交へた音楽的なのに趣味がある。元山における独唱会は十三日の予定である。

3) 1930年10月13日(月) 2面3-5段「永井郁子女史／独唱会を京城に開く」 目下南鮮方面を演奏旅行中の声楽家永井郁子女史は愈々十八日京城に演奏会を開催することに決定した。女史の来城はこの際各方面の期待に迎へられているだけに演奏会開催の際は嚙かし好評を湧立たすであらうと見られている。

4) 1930年10月14日(火) 5面3-6段「燦然たる邦訳歌詞／永井郁子女史に／捧げられる楽壇の感謝」 永井郁子女史が来る十七日夜七時から公会堂のステージにそ

の美声の真髓を展開する。永井女史はすでにその発声においてテクニックにおいて本邦楽壇にきこゆる名歌手、その天成の渾然たる声質に近來さらに円熟満腔、珠玉瑕疵をみとめぬ神境に達してをり殊に●●を開明する邦訳歌詞はその独壇場―邦語をして完全に音譜にハーモニーさせ異邦人の感情美をぴったりと邦人にアピールさせたその努力はいま天衣無縫の芸術を形成しすでに掛かる独壇場は本邦楽壇に燦然の名声を誇っている。永井郁子女史のソロの夕―秋の半島楽壇はここにその声楽の最高峰に達するであらふ

「堂々たる存在」(奥山●●郎氏) 恐らくベツオールド夫人門下で永井さんと同席して太刀打の出来る歌手は一人もあるまい、藤原義江の感傷的なセンチメンタリズムの歌唱振では勿論なく全くの本格的の歌声で行くところ可ならざるなき凄い咽喉の技巧と頭の働には全く彼女の主義に反対する者といへど頭が下るのである、この永井さんの日本音楽への進出はあたかも洋画家が邦画に転向すると同様の難行苦行の大仕事であるのに極めて無造作にやって続けるのは何といっても天分で追隨者の真似の出来ない独自の強味である。

「待ったこの人」(宮城道雄氏評) 私は可成り長い間自分の芸術上の理想を実現するのに有力な協力者を発見するに苦しみました。突如彗星のごとく永井さんの出現を見その発音の正確に歌ひ廻しの巧みさ表情を正したヴォカルの第一席に座していられる永井さんの芸術は必ずや聴くひとの興味を唆らずには置きませぬ。

5) 1930年10月14日(火) 2面3-5段「声楽壇の最高峰／ソプラノ名歌手／永井郁子女史独唱会」【写真：アップのトルソー】会員券：白券二円、青券一円、学生小供七十銭、人も知る、永井郁子女史は女流声楽家の第一人者である。と同時に、女史の「邦語歌唱」提唱運動の創始者たることも余りに有名だ。去る大正十四年秋から「自国語を愛しましょう」の大義を敢然と振り翳し、誤った世界主義の迷妄に陥った人々に一矢を報ひ、外国歌詞のすべてを邦語を以て歌ひこなす端緒を切り、併して西洋音楽形式と組歌とによる日本音楽の革新を完成せしめた。歌ふところ、テクニックの神境、エキスペッションの巧妙、かてて加へて、こよなき美声は、聴者を恍惚境に導かずにはおかない、けだし、今秋半島声楽界の最高の収穫たるを疑わぬわけである。日時：十月十七日午後七時、場所：長谷川町京城公会堂、主催：朝鮮新聞社、後援：永井郁子女史後援会

6) 1930年10月15日(水) 3面1-3段「声楽壇の最高峰／ソプラノ名歌手／永井郁

子女史独唱会」【写真：アップのトルソー】文面は9)と同じ

7) 1930年10月16日(木) 3面2-6段「永井郁子女史ソロの夕／独唱プログラム決定／待たるる十七日の夜」【写真：立ち姿】永井郁子女史ソロの夕—紅唇より轟き流るるメロディに十七日夜の公会堂は呆然陶酔の法悦境を現出するがその声量、テクニクの妙を尽くすにそのプログラムの素晴らしさ。／独のブラームス、英のヘース、米のフォスター、伊の民謡、仏のマスネ、澳のバッハ、それに新日本音楽—世界の名曲を抜粋して珠玉をつづった感があり、永井女史ならで誰がこの絢爛のプログラムを編み得やう—殊に浄瑠璃歌謡曲「阿波の鳴門」の巡礼歌「三十三間堂の木遣歌」「朝顔日記中の朝顔の歌」などの古典は女史によって雄弁に美麗に色●らしく●出されるであらふ。ピアノは東都楽壇の名花藤井光子嬢、箏三絃は●●●箏は中西響子女史、尺八は琴古流の古本●●●氏のいづれも中央に鳴る大家泰斗と●なり、加ふるに特別賛助出演として大田●之助氏がステージに立つ。／その夜の公会堂のステージこそ半島楽壇●●●●美はしくあへかな芸術境を現出するであらふ。／プログラム／ピアノ独奏：ショパン「ノクタン」、メンデルスゾーン「前奏曲」／ベートーヴェン三曲：「愛しきジェニイ」「われ御身を愛す」「神のみいづ」／シューベルト三曲：「子守歌」「鱒」「野ばら」／休憩／各国名曲九種：「(日) さくらさくら」「(支) 娘々祭」「(露) ヴォルガ舟唄」「(独) 折ればよかった(ブラームス作曲、高野辰之作詞)」「(英) 故郷の廢家(ヘース作曲、犬童球溪作詞)」「(米) オールドブラックジョウ(フォスター作曲、牛山充作詞)」「(伊) サンタルチア(ナポリ民謡、堀内敬三作詞)」「(仏) 悲歌(ヴァイオリン前奏)(マスネー作曲、二見公平作詞)」「(独) アベマリア(ヴァイオリン助奏)(バッハ作曲グノー編曲)／休憩／新箏曲：「秋の歌(西條八十作歌、宮城道雄作曲)」「若水(島崎藤村作歌、宮城道雄作曲)」「せきれい(北原白秋作歌、宮城道雄作曲)／浄瑠璃歌謡曲：「義太夫『阿波鳴門』中の巡礼歌(●●●●●●)」「同『三十三間堂』中の木遣音頭」「同『朝顔日記』中の朝顔の歌(●●●●●作歌)」

8) 1930年10月17日(金) 3面1-7段「声楽壇の最高峰／ソプラノ名歌手／永井郁子女史独唱会」日時：十月十七日午後七時、場所：長谷川町京城公会堂、会員券：白券二円、青券一円、学生小供七十銭、主催：朝鮮新聞社、後援：永井郁子女史後援会、「プログラムの中より／親しみ深き邦訳歌詞(一)」「いとしきジョニー(何れの日にいとしきジョニー…[後略、以下同じ])」「御身を愛す(愛する思ひは朝

夕絶えず…」 「子守歌（眠れ眠れ●ぐし童…）」 「鮎（川瀬をわけて行くよ鮎は…）」 「娘々祭（楡の若葉の風かおる…）」 「折ればよかった（折らずに置いてきた山かけのさゆり…）」 「オールドブラックジョー（若き見習となりて…）」 「サンタルチア（月は高く空に照り…）」 【写真：本社訪問の二氏、（右）永井郁子女史、（左）ピアニスト藤井光子嬢】

9) 1930年10月18日(土) 2面6-8段「今十七日午後七時（於公会堂）／永井女史独唱会」「永井女史独唱会の親しみ深き邦訳歌詞（二）」 「悲歌（おお去にし春よ…）」 「アベマリヤ（アベマリヤ、神の恵にみちたる君…）」 「母の唄（寝られぬままに起きいでて…）」 「若水（汲めどつきせぬ若水を…）」 「せきれい（山川のたぎつその…）」 義太夫三つ 「阿波鳴門中の巡礼歌（ふだらくや岸打波はみくまの…）」 「三十三間堂中の木遣音頭（和歌の浦には名所がござる…）」 「朝顔日記中の朝顔の歌（霧の干す間の…）」

10) 1930年10月23日(木) 4面7段「永井郁子女史／群山で独唱会」（群山）永井郁子女史の邦語独唱会は群山地報社主催にて二十三日夜喜笑館にて開催のはずだが名声の高い同女史の集ひだから当夜は盛況を呈することであらふ。

11) 1931年2月19日(木) 4面6-7段「永井郁子女史／沙里院で音楽会」（沙里院）声楽家永井郁子女史は来る二十二日来沙同業京城日報支局主催本社及各邦語新聞支局後援の下に旭座において音楽会を開催する事になったるが世界的声楽家の事とて前人気頗る盛んなればさぞ盛況を呈するであらうと。

12) 1931年2月21日(土) 3面10段「永井郁子女史／独唱会開催」（●州）現楽壇にその盛名を知られている声楽の大家永井郁子女史は●●高等女学校●●会に招聘せられ来たる二十一日午後七時より公立小学校大講堂に邦語独唱会を開催することとなったが曲目中でも殊にシューベルトの『野ばら』『浄瑠璃歌謡曲』等には女史独特の妙味あり、その他世界の名謡十数曲を独唱する由で●州では未だかつて得られなかった声楽の大家を迎え得ることとて一般より非常に期待されている。

13) 1931年10月24日(土) 4面7-8段「永井郁子女史、邦語独唱会、公州で開催」（公州）公州高等女学校校友会音楽部主催である邦語歌手の第一人者永井郁子女史の邦語独唱会は「自国語を愛しませう」と言う標語を掲げて十九日午後七時より道●●議会議場にて開催したが、階上階下共立錐の余地なく●する者四百余名で非常な盛況を呈した（写真は壇上の女史）【写真：2段抜き舞台写真】

記事一覧（3）『毎日申報』の永井郁子関連記事（5件、写真2件）

1) 1928年4月22日(日) 2面4-9段:「日本からの世界的名歌手／永井郁子女史独唱会／伴奏は大平雪子嬢」二十七日午後七時半、市内京城公会堂にて開演、大場勇之助氏等が助演、普通二円、学生一円、主催毎日申報社【写真:半身像】

2) 1928年4月23日(月) 2面7-12段:同上【写真:半身像】

3) 1928年4月25日(水) 3面2-3段:「ソプラノ名歌手／永井郁子独唱会／27日夜公会堂にて」名歌手永井郁子の邦語独唱会を本社主催にて二十七日午後七時半より市内長谷川町公会堂にて開催、大平雪子、大場勇之助氏の助演を始め、尺八と箏の名手も友情出演する予定で、曲目は次の通り、入場料は普通券二円、学生券一円[曲目および出演者一覧あり]

4) 1928年4月29日(日) 2面8段「美しい肉声で／聴衆陶醉／盛況裏に終了／永井女史独唱」本社主催の永井郁子女史独唱会は二十七日午後七時三十分より府内長谷川町公会堂にて開催されたが午後六時から集まって来た聴衆は七時前には八百名に達し、定刻には立錫の余地もなく大満員になり、不得已正門が閉められるとそのまま帰った人の数も多く、字資本社事業部長の挨拶の後、大平雪子嬢のピアノ演奏から開幕、永井女史の独唱で●●を●●にし、大盛況裏に十時に散会した。

5) 1932年5月18日(水) 2面6-7段「永井郁子女史／独唱会臨迫／楽壇の明星、元老／十九日夜於公会堂」日本楽壇の明星で女流声楽家として長い歴史を持つ永井郁子女史はこの間、満州の外郭地を巡回し、今度十九日夜には公会堂にて独唱会を開催する予定で、永井郁子女史は今から5年前に邦訳歌詞を提示した楽壇の元老だけに斯界の期待も大きい。

(本研究は JSPS 科研費 JP18K00155 の助成を受けたものです)